明治 41 年度の庭球部

部活動を黎明期から振り返る

こんな部あります！　ありました！

概説・尚志会の部活動

一般には校友会と称される生徒の組織を、岡中・一中では尚志会と称した。多くの中学よりおよそ10年早く組織されたこの学校では、中学生による自主的活動の全過程を経験した。①「部活」以前の黎明期、②「部」の始まり、③「選手」の始まり、④部活動としての成立期、⑤報国団の４年、⑥戦後期、これを新制高校の生徒会活動が引き継ぐ。④と⑥は「部活」という観点では現代とほぼ同じだから、説明は不要だろう。

創立時の尚志会は、会頭・副会頭も生徒で、教員にはほとんど発言権がなく、授業以外の学校生活は尚志会が仕切っていたかの感があった。明治20年（1887）に角帽を制帽に選んだのも、春の運動会や秋の舟遊会を恒例の行事としたのも、演説討論会の運営も、尚志会の自主的活動であった。

明治29年（1896）の尚志会規則（『烏城』７号掲載）によって、大きく変わったことが判る。ここから生徒全員の加入となり、雑誌部等の５部が置かれ、教員が部長となった。当時は、記名投票で幹事５名と書記５名（のちには書記を廃し、幹事を増員）が選ばれ、彼らが役員として尚志会の会務を処理し、各部に別れては部の業務を担当した。基本的には、部には部長と幹事・書記の３人がいるだけで、一般生徒の加入はなく、現代の部活とは全く違っていた。19世紀の世紀末の中等校で、最も流行ったスポーツは野球と端艇（ボート）で、例えば端艇担当の幹事の業務は、日常は修繕費を徴収して生徒に貸し出す、年行事としては舟遊会の開催が主たるものだった。明治34年（1901）には、各組で公選された委員たちが、全国大会に出場する代表を生徒全員から選んだ。彼らは“選ばれた巧手”、即ち「選手」。岡中が端艇競漕の全国大会で優勝したのは明治44年（1911）。同様のやり方で野球の選手が選ばれるのは明治36年（1903）からである。1910年代になると、運動の分野はますます活発となり、選手の存在が認められた部が増え、その年代の終わりには、全ての運動部が選手を抱えた。

「部員」という語の定着は遅れたが、「部」は現代のものと似てきた。だが、幹事の選出には問題が残った。幹事の選出には公選という伝統を残したから、部の目的からはよそ者と見られることも生じたからで、この件は紆余曲折のあとの昭和12年（1937）、各部から幹事２名を推薦し、校長が任命することで落着した。

戦時体制にはいると、政府は校友会の独自性と自主性を目の敵として、昭和16年（1941）には全国画一的な組織への改組を強制したから、尚志会は尚志報国団と改称した（⑤の報国団の時代）。放課後、生徒は剣道等の「班」に属して学年別の全校鍛錬で汗を流し、その後で有志は部活に参加した。この年、全国の中等校の制服・制帽も軍服の色に統制されて、太平洋戦争を迎えた。

History of Club Activity

※**青色**は現在も活動中

尋常中学	明治19年（1886）	尚志会結成（校友会の結成は全国的に最も早い時期）
	29年（1896）	尚志会改革により、雑誌部・運動部・演説討論部・図書部・会計部が事業を分担。運動部が、武術（撃剣・柔術）と通常運動（陸上・水上）の運営を担当 ◎この頃、スポーツが盛んになる。 部員という概念はなく、部は世話人的役割
	30年（1897）	尚志会がボート３隻と野球道具を購入 ベースボール倶楽部結成
岡山中学	32年（1899）	運動部を分割し、野球、端艇、武術の３部が独立 さらに、陸上運動部、水上運動部、武術部に改称
	39年（1906）	陸上運動部から **野球部**、**庭球部**（現：**ソフトテニス部**）が独立

水上部（昭和２年頃）